

『太平經經鈔』丙部卷之三(涵七四六、葉十二表第三行、葉十二裏第十行)

【原文】

今有大丈夫巨力之士、無不能制蚘蟲者、一升蚘蟲共蝕此人、乃病痛不得臥、劇者著牀。今
蛄蟲蚤蝨小小、積衆多、共食人。蠱蟲者能殺人、蚤蝨同使人煩滿、不得安坐、皆生瘡耳。
人之害天地、亦若是耳。穿地見泉、地之血也。見石、地之骨也。土、地之肉也。取血破骨
穿肉、復投瓦石堅木於地中爲瘡。地者、萬物之母也、而患省若此、豈得安平。凡人居母身上、
亦有障隱多少。穿地一尺、爲陽所照、炁屬天。二尺者、物之所生、炁屬中和。三尺者、及地
身陰。過此已往、皆傷地形也。

【訓】

今 大丈夫・巨力の士有れども、蚘蟲を制する能はざる者無し。一升の蚘蟲共に此の人を
蝕めば、乃ち病痛して臥するを得ず、劇しき者は牀に著く。今 蛄蟲・蚤蝨小なれども、
積むこと衆多にして、共に人を食らはんとす。蠱蟲は能く人を殺すも、蚤蝨も同じく人をし
て煩滿にして、安坐するを得ず、皆瘡を生ぜしむのみ。

人の天地を害するや、亦た是くの若きのみ。地を穿ちて泉を見るは、地の血なり。石を見
るは、地の骨なり。土地の肉なり。血を取り骨を破り肉を穿ち、復た瓦石堅木を地中に投じ
て瘡を爲す。地は、萬物の母なり、而して患省すること此くの若くんば、豈に安ずるを得ん
や。凡そ人は母の身上に居りて、亦た障隱有ること多少ぞ。地を穿つこと一尺、陽の照らす
所と爲る、炁は天に屬す。二尺は、物の生ずる所、炁中和に屬す。三尺は、地の身に及び、
陰なり。此を過ぎて已往は、皆地形を傷つくるなり。

【訳】

今ここに立派な男子や力持ちがいたとして、蚘虫を抑えることができないう者などいない。
だが、一升もの蚘虫が一斉にその男を喰らうならば、その男は痛み苦しんで、横になること
もできず、甚だしい場合、病床につくことになる。今、蛄虫(蚘虫)や、ノミ・シラミは
ちっぽけなものではあるが、数多く集まって一斉に人を喰おうとしたでしょう。寄生虫は人
を殺すことがあるが、それと同様にノミやシラミもまた人を不快にさせ、ゆったり坐ること
もできず、どれも傷を作り出すこととなるのである。

人が天地を傷つけるのも同様である。大地を掘ると泉を目にするが、それは大地の血であ
る。石を目にするが、それは大地の骨である。土は、大地の肉である。血を汲み取り、骨を
破り、肉を穿ち、また瓦や石、堅い木材を地中に打ち込んで傷をつける。大地とは万物の母

であるのに、このように過ちを犯してどうして安全であることができようか。そもそも人は母の身体の上において、またどれだけ土を掘りかえていることだろうか。大地に一尺穴を掘れば、そこは太陽に照らされ、その炁は天に属する。二尺であれば、そこから物が生まれ、その炁は中和に属する。三尺ならば、大地の身に及び、陰である。これ以上掘れば、全て地形を傷つけるのだ。

【注】

○蚘蟲

(漢語大詞典) 一种介壳虫或者粉蚘。蚘总科的任何成员。

○蛄蟲

蛄蛄。ここでは上との関係から「蚘蟲」に作るべきか。

○蠱蟲

梁・任昉『述異記』「晋末、荊州久雨、粟化為蠱蟲害人。」

明・李時珍『本草綱目』虫四・蠱虫〔集解〕「陳藏器曰、古人愚質、造蠱圖富、皆取百蟲入瓮中、經年開之、必有一蟲盡食諸蟲、即此名為蠱、能隱形似鬼神、與人作禍、然終是蟲鬼。咬人至死者、或從人諸竅中出、信候取之、曝乾。有患蠱人、燒灰服之、亦是其類自相伏耳。」

『宋書』顧覲之伝「時沛郡相縣唐賜往比邨朱起母彭家飲酒還、因得病、吐蠱蟲十餘枚。」
蠱毒 『太平広記』卷二百十九所収『玉堂閑話』「近朝中書舍人于邁、嘗中蠱毒、醫治無門、遂長告、漸欲遠適尋醫。一日、策杖坐於中門之外、忽有釘鉸匠見之、問曰、「何苦而羸爾如是。」于即為陳之。匠曰、「某亦會中此、遇良工、為某鉸出一蛇而愈。某亦傳得其術。」邁欣然、且祈之。彼曰、「此細事耳。來早請勿食、某當至矣。」翊日、果至、請邁於舍簷下、向明張口、執鈴俟之。及欲夾之、差跌而失、則又約以來日。經宿復至、定意伺之、一夾而中。其蛇已及二寸許、赤色、粗如釵股矣、遽命火焚之。邁遂愈、複累除官、至紫微而卒。其匠亦不受贈遺、但云、「某有誓救人。唯引數觴而別。」

○煩滿

煩懣とも。

後漢・嚴忌「哀時命」 「幽獨轉而不寐兮、惟煩懣而盈匈。」

『素問』評熱病論篇「汗出而身熱者、風也。汗出而煩滿不解者、厥也。病名曰、風厥。」

○穿地見泉、地之血也

『管子』水地篇「地者、萬物之本原、諸生之根苑也。美惡賢不肖愚俊之所生也。水者、地之血氣、如筋脈之通流者也。故曰水具材也。」

○見石、地之骨也

西晋・張華『博物志』 「地以名山為輔佐、石為之骨、川為之脈、草木為之毛、土為之肉。三尺以上為糞、三尺以下為地。」

○患省

「省」通「眚」。

『書經』洪範「曰王省惟歲、卿士惟月、師尹惟日。」蔡沈集伝「王者之失得、其徵以歲。」
孫星衍注、「史遷省作眚。」

『公羊伝』莊公二十二年、「大省者何、災省也。」

○障隱

『太平經』卷三十六・守三実法「天道有寒熱、不自障隱、半傷殺人。故天為生萬物、可以衣之。」

『太平經』卷九十二・万二千国始火始氣訣第一百三十四「善哉。子之所疑、可謂入道矣。一國有變、獨一國日不明、名為蝕。比近之國、亦遙睹之、其四遠之國、固不蝕也。斗極凡星不明、獨失其天意者不明、其四遠固不蝕。」「今請問於何障隱而獨不明邪。」

ただし、『太平經』の該當箇所では「彰隱」に作る。

『太平經』卷四十五・起土出書訣第六十一「地者、萬物之母也、樂愛養之、不知其重也、比若人有胞中之子、守道不妄穿鑿其母、母無病也。妄穿鑿其母而往求生、其母病之矣。人不妄深鑿地、但居其上、足以自彰隱而已、而地不病之也。大愛人使人吉利。」「今願聞自彰隱多少而可。」「凡動土入地、不過三尺、提其上。」

『太平經』卷三十六・卷九十二の「障隱」の用例では、隠れること・障壁ぐらゐの意味。ただし、『太平經』卷四十五では「彰隱」に作ることに、また続いて太陽の光の及ぶ範囲や陰陽の気との関係が述べられていることから、「土を掘ったところを日にさらすかどうか」という意味と考え、「掘り返す」と訳出した。

○中和

『太平經鈔』乙部卷二「故清者著天、濁者著地、中和著人。」「太陰、太陽、中和三氣共為理、更相感動、人為樞機、故當深知之。」「民者主為中和譚、中和者、主調和萬物者也。」

○地形

『太平經』卷六十七・六罪十治訣第一百三十一「上犯天文、下犯地形」

【校勘】

『太平經』卷四十五「起土出書訣第六十一」（六表・六裏）

「今大丈夫力士、無不能拘制疥蟲、小小不足見也。有斗所共食此人、病之疾痛不得臥、劇者著床。今疥蟲蚤蝨小小、積衆多、共食人、蟲蟲者殺人、疥蟲蚤同使人煩懣、不得安坐、劇生瘡瘍。夫人大小比於地如此矣、寧曉解不。」

「唯唯。」

同（七裏・八裏）

「唯唯。今人生天地之間、會當得室廬以自蓋、得井飲之、云何乎。」

「善哉、子之言也。今天不惡人有室廬也、乃其穿鑿地太深、皆為瘡瘍、或得地骨、或得地血、何謂也。泉者、地之血。石者、地之骨也。良土、地之肉也。洞泉為得血、破石為破骨、良土深鑿之、投瓦石堅木於中為地壯、地內獨病之、非一人甚劇。」

「今當云何乎。」

「地者、萬物之母也、樂愛養之、不知其重也、比若人有胞中之子、守道不妄穿鑿其母、母無病也。妄穿鑿其母而往求生、其母病之矣。人不妄深鑿地、但居其上、足以自彰隱而已、而地不病之也。大愛人使人吉利。」

「今願聞自彰隱多少而可。」

「凡動土入地、不過三尺、提其上。」

「何止以三尺為法。」

「然。一尺者、陽所照、氣屬天。二尺者、物所生、氣屬中和。三尺者、屬及地身、氣為陰。過此而下者、傷地形、皆為兇。古者穴居云何乎。同賊地形耳。多就依山谷、作其巖穴、因地中又少木梁柱於地中、地中少柱、又多倚流水、其病地少微、故其人少病也。後世不知其過、多深賊地、故多不壽、何也、此劇病也。」

『三洞珠囊』卷一

『太平經第四十五卷』又云、今天不惡人有廬室也、乃惡人穿鑿地太深、皆為創傷、或得地骨、或得地血者。泉是地之血也、石為地之骨也。地是人之母、妄鑿其母、母既病愁苦、所以人固多病不壽也。凡鑿地動土、入地不過三尺。為法一尺者、陽所照、氣屬天也。二尺者、物所生、氣屬中和也。三尺者、及地身、氣屬陰。過此而下者、傷地形皆為凶也。古者、依山谷巖穴不興梁柱、所以其人少病也。後世賊土過多、故多病也。

【原文】

平道德價數貴賤、解通愚人心。

今一旦賜子千斤之金、使子與國家、寧得天地之懽心、以調陰陽、使災異盡除、帝王老壽、治致太平邪。今齎萬雙之璧、以歸國家、寶而藏之、此天下珍物也。寧使六方太和之炁盡見、瑞應悉出、夷狄却去萬里、不為害。

【訓】

道德の價數貴賤を平し、愚人の心に解通せしむ。

今一旦子に千斤の金を賜り、子をして國家を與へしめば、寧んぞ天地の懽心を得て、以て陰陽を調へ、災異をして盡く除き、帝王をして老壽たらしめ、治をして太平を致さしめんや。今萬雙の璧を齎し、以て國家に歸し、寶として之を藏せば、此れ天下の珍物たらん。寧んぞ六方太和の炁をして盡く見はし、瑞應悉く出だし、夷狄萬里に却去し、害を爲さざらしめんや。

【訳】

道德の価値や尊さをの軽重を示し、愚人の心に理解させる。
今、ひとまずそなたに千斤の黄金を授け、国家を与えたとしても、どうやって天地の歓心
を買い、陰陽を調和させ、災害を全て取り除き、帝王を長生きさせ、政治を太平にさせるこ
とができようか。今、一万対もの璧玉を持っていたとして、それを国家へと献上し、宝物と
して納めたとすれば、天下の宝物となろう。とはいえ、それでどうやって天地四方の全てが
調和した炁を余すところなく現出し、あらゆる瑞祥が現れ、異民族を遙か彼方に退却させ、
害をなさないようにさせられようか。

【注】

○平

(漢語大詞典) 旧时的一种衡量标准。如…庖平・漕平。

『太平経』卷四十六・道無價却夷狄法第六十二「今師前後所與弟子道書、其價直多少。」
「噫、子愚亦大甚哉。迺謂吾道有平耶。諾。為子具說之、使子覺悟、深知天道輕重、價直
多少。」

○價數

『太平経』卷一百十四庚部之十二「齋家所有、皆有價數、乃為解之。」

○齋

『史記』秦始皇本紀「乃令人海者齋捕巨魚具。」

○萬雙之璧

『太平経』卷四十六・道無價却夷狄法第六十二「故賜國家千金、不若與其一要言可以治者
也。與國家萬雙璧玉、不若進二大賢也。」

『太平経』卷九十己部之五・冤流災求奇方訣第一百三十一「今行逢千斤之金、萬雙之璧、
不若得明師乎。」

○六方太和之炁

『太平経鈔』乙部卷二「中和為赤子、子者乃因父母而生、其命屬父、其統在上、託生於母、
故冤則想君父也。此三乃夫婦父子之象也。宜當相通辭語、並力共憂、則三氣合並為太和
也。」

『易』乾卦「保合大和乃利貞」朱熹『易本義』「大和陰陽會合中和之氣也。」

○瑞應

『西京雜記』卷三「瑞者、寶也、信也。天以寶為信、應人之德、故曰瑞應。」

【校勘】

『太平経』卷四十六・道無價却夷狄法第六十二(一表・一裏)

「今師前後所與弟子道書、其價直多少。」

「噫、子愚亦大甚哉。迺謂吾道有平耶。諾。為子具說之、使子覺悟、深知道道輕重、價直多少。然。今日賜子千斤之金、使子以與國家、亦寧能得天地之歡心、以調陰陽、使災異盡除、人君帝王考壽、治致上平耶。今齋萬雙之璧玉以歸國家、寶而藏之、此天下之珍物也、亦寧能使六方太和之氣盡見、瑞應悉出、夷狄卻去萬里、不為害耶。今吾所與子道畢具、迺能使帝王深得天地之歡心、天下之群臣遍說、歧行動搖之屬莫不忻喜、夷狄卻降、瑞應悉出、災害畢除、國家延命、人民老壽。審能好善、案行吾書、唯思得其要意、莫不響應、比若重規合矩、無有脫者也。」

同（四裏）

右平道德價數貴賤、解通愚人心